安全登山フェスタ 2016/12/04 １．

1. 長野県の遭難の現状

講演者

長野県警察山岳救助隊副隊長　弦間将樹

長野県は山の県　１００名山内→３０座ある。

遭難は　平成２７年までの１０年で１．８倍の２５０８件(全国)発生し、長野県における遭難者は東京の人が多い 。

長野県の特徴として、森林限界より上で転落が多く、怪我の救助要請が多い 。他県の遭難事例は道迷いが多い。

救助要請の流れ

救助要請→１１０番受理→内容確認→本部→山岳航空隊 要救助者の携帯でGPS位置確認　各部署へ連絡 する。隊員は平常勤務に従事している為、出動態勢が整うのに時間がかかる。

確認事項

本人からの連絡か？同伴者、目撃者か？出動したら遭難者がいない事例がある。→費用（遭難保険加入の有無）、

民間へ依頼アリ→　費用加算

携帯は救助隊からの待ち受け専用に（家族等に連絡している内に電池がなくなる）

救助体制　長野県３５名 　　通常は民間(山小屋関係者１０００名)に対応依頼。 長野県　中型ヘリ２機保有。　松本空港待機し、ほぼ　県内３０分で到達 可能

救助の仕方

ホバーリングによるつり上げが基本　着陸はしない。 (ダウンウォッシュかなりの風、台風並み。周りの人は気を付けてもらう。） 　　遭難者の荷物は最低限のみ。同乗者は乗れません。

出動前の確認

遭難者の服装(色)・現場状況・風向風力・視界状況・他 を通報者にお聞きします。むやみにヘリに向けて手を振らない事。ヘリは全面しか見えないので、混乱する。

死亡した事例、命を取り留めた事例

何れもヘルメットの着用が生死を分けている。ヘルメット着用を推進したい。

 ヘルメットは登山開始から（着用せずに死傷した例有り。上高地～では横尾から推奨）

Q.無線機の効用は→長野県警ではアマチュア無線機は持っていない。最近は携帯での対応がほとんど

Q.ヒトココは有用か？→ある程度電波が飛ぶので有用、県警にも親機あり。それによる救助例はまだなし

　Q.救助要請の時緯度経度を聞かれた→ピンポイントで捜索出来るので、非常に有用である。

 ２．チーム安全登山トークショー

　気象遭難　リスクの高い山 　１．山小屋や避難小屋の間隔が長く、尾根上からのエスケープルートが少ない。 　２．森林限界より上のルート 　３．日本海気候に属する山岳 　４．岩場が少なく草原が続く、なだらかなルート 　暴風雨から身を守り、低体温症にならないようにする（隠れる場所が少ない）。 　山では天気より風が重要 　天気図では等圧線の間隔東京―名古屋間(約３００km)に線があるかないかが目安 　風雨風雪の中では歩かない。風速10Ｍ以上では、低体温症のリスクが高い。体幹温度が３４度下がると山では回復しない 気象遭難は天気予報では防げない。 　１、天気予報を見ている人が、遭難していることが多い。 　２．山の天気予報と書かれていても要注意  　３．平地と山の天気が大きく異なるときがある。 　４．コンピューターの算出結果をそのまま掲載するのが多い。 　５．コンピューターと地形のモデルが違う場合がある。 信憑性 　１．発表した気象予報士の名前が掲載されている。 　２．数百か所の山頂の「予報を行っている。 　３．発表の頻度が１日３回以上   予報について 　雷、ゲリラ豪雨はわかりにくい・明らかならば前日に予報する。 　雲の高さは夏７km、冬３ｋｍ 現地では 　観天気が重要　雲の動きなど 　入山前に携帯の電波が届く間に必ず雨雲を確認しておく 　微妙な状態では、まず現地へ行ってみるべし 　週間は外れることが多い 　 引き返しのポイント（風が急に変わるところ)  　１．森林限界、樹林から開けたところに出た時

２．斜面から尾根上に出たとき 　３．尾根から主稜線へ出たとき 。